

現代

第14章 占領と国際復帰 1. 戦後改革 (1) 東西対立と日本占領

解説

GHQ 鳥取軍政部の鳥取県への進駐



八月十五日
印る、独立の祝日
招待を受けたい記念
22. 8. 15

★英連邦国軍の進駐
鳥取県…インド
島根県…インド
岡山県…イギリス
広島県…オーストラリア
山口県…ニュージーランド
四国4県…イギリス

インド第1パンジャブ連隊★ (鳥取市歴史博物館蔵)

イギリス連邦国軍の一員として、かつての40連隊兵舎(岩倉)に駐屯したインドパンジャブ連隊は、インドがイギリスより独立したことでインドに帰国することになる。写真は独立を祝って兵舎の近所のこどもたちを招待した時の写真。

GHQ / SCAP = 連合軍最高司令官 / 総司令部

(General Headquarters of the Supreme Commander for the Allied Powers) の略。

第2次大戦に敗れた日本を占領・管理する総司令部として、米太平洋陸軍総司令部の機構が連合軍総司令部に転用されるという二重構造になった。G1～G4までの参謀部と民政局、経済科学局、民間情報教育局等からなる幕僚部(専門部)。極東国際軍事裁判所も付置された。1948年最盛時には約6,800人(うち文官3,850人)

占領軍の日本進駐は、当初はアメリカ軍のみで行われていたが、途中から英連邦国軍も参加し、中四国地方を担当するようになった。しかし、1947(昭和22)年8月15日にインドが英連邦から独立し、鳥取に駐留していたパンジャブ連隊は帰国した。その後、インドからさらにパキスタンが分離独立したために、パンジャブ部隊の隊員の多くはパキスタンに所属することになる。

なお、地方軍政部の情報部などはアメリカが統括していた。進駐軍の中には、アメリカの日系人二世も少なからず勤務していた。

■ 占領軍の鳥取県への進駐

45年	10月28日	米第6軍第10軍団情報官ラスボン中佐ら6名県内巡視(～11/6)
	10月29日	第21連隊オスボン少佐ら197名鳥取駅着
	12月	第76軍政中隊鳥取分遣隊設立(将校6、下士官16名)
46年	4月25日	英印パンジャブ隊先遣隊進駐(5月20日本隊が進駐)
47年	8月15日	インド、英連邦より独立(10月までに撤退)

■ 美保航空隊

45年	11月2日	米軍コード代将米子着(11/3 米軍ウォーター中将ら米子着)
	11月12日	米第10軍団24師団第3聯隊バーン大佐以下160名進駐
46年	3月30日	英連邦航空隊先遣隊10人が到着
	5月20日	英連邦本隊クリスティー大佐ら進駐(米軍は熊本に移駐) *英空軍第11・17飛行中隊、インド空軍第4飛行中隊
48年	4月1日	第34 ^{どうほへいりよだん} 豪歩兵旅団が管轄(常駐せず)

(担当：小山富見男)

参考資料

・鳥取軍政部…毎月あるいは半月ごとに報告書(軍政レポート)を作成し、GHQ 本部及び近隣の関係部局に配布していた。(現在翻訳中)

★の写真は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。